

2023年11月12日 No.3693

先週の講壇から

「純白になる日まで」

ヨハネ黙示録 第7章9節～17節

聖句「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。」
(7:14)

1. 《骨揚げの時》 32年前、私は既に牧師でしたが、父の葬儀（仏式）を喪主として催しました。僧侶や親族の接待から香典の勘定に至るまで、全て遺族が行ないます。隣保の協力もありますが、初七日にはお礼の接待も必要です。当時の火葬場は吹き曝しで窯が2つあるだけでした。骨揚げの時に、塩煎餅のように枯れ果てた父のお骨を菜箸で拾いながら、天麩羅を揚げている気分になりました。父が遺体から骨へと変容したことに、実感を持ってなくなってしまったのです。

2. 《茶毘に付す》 仏教用語の「茶毘」はパーリ語「ジャーペタ／体を焼く」という意味です。但し、日本も百年前には土葬が中心でした。戦後急速に火葬が普及したのです。火葬の起源は仏教ではなく、ヒンドゥー教の「最後の犠牲」とされています。神々に自分の体を焼いて奉げる宗教儀礼「燔祭」だったのです。カトリック信仰の根強い国々では「再臨の時に、生身の肉体が復活する」と信じられていて、今も土葬が中心です。「識者」の中には、日本の火葬率の高さを誇り、土葬の国や地域を「前近代的」と侮蔑する者がいます。「近代的である」か否かには何の意味もありません。大切な人を懇ろに、丁寧に葬ることが大切なのです。

《苦難を通る》 故人は骨壺や遺影や墓の中に存在するものではありません。私たちが祭壇を築いたり墓参りをするのは、故人と向かい合うための儀式なのです。「黙示録」は聖徒を「白い衣を着た者たち」と呼びます。「小羊の血で」洗われて「白くした」と言うのです。私たちが無罪の者であるか否かは問題ではありません。どんな人間でもキリストの血によって洗い清められるならば、罪のない者になることが出来るのです。小羊は神に献げられる犠牲の家畜です。「羊飼い」は主キリスト、「羊」は信徒であるのに、キリストが「小羊」なのです。高い天から私たちを見下ろして憐れまれたのではなく、実際に世に生きて、私たちと同じく憂いと悩みを舐めて、十字架の上に絶望の叫びを上げて死んで逝かれたのです。天に召された人々を思うならば、それぞれに「大きな苦難」を通られた方々です。しかし、主は彼らの苦難を御存知です。今や彼らと共に主が居られるのです。

朝日研一朗牧師